
王と妃 千妃

楽雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王と妃 千妃

【Nコード】

N1938D

【作者名】

楽雨

【あらすじ】

王とその王妃の物語。二人はとても仲睦まじかった。

ギシギシと、床が軋む。古い大きな寺。

襖を開けると千妃^{せんひ}はいつものように平伏していた。

「王……」

千妃は顔をあげた。王宮から逃げ二月。もともと細い彼女の体は、さらに肉がおちた。

「千妃、大丈夫だ、追手は寺に気付かなかったようだ。もう少し北へ行こう。大丈夫だ。もっと寒くなるが、安心して暮らせるだろう……大丈夫だ」

大丈夫。

一月前から、王はそう繰り返す。彼女を安心させるため。

千妃はいつものように王に笑顔を向けた。美しく花のように。王は彼女を抱きしめた。

「大切な千妃。必ず……共に逃げようぞ」

「いえ、もう……いいのです」

「はい、かならず」

そう言っていた返事が変わった。王は驚き、千妃の瞳をのぞく。

「妾を、殺めくださいまし」

「千妃」

「花種^{かしゅ}が、教えてくれました……妾のせいであると」

おとなしい侍女だった。千妃の髪をいつも結ってくれていた。この、あてのない旅にも付いて来てくれた。

「お前のせいだ」

張り詰め、押し込めていた思いを全て吐き出すように、花種は千妃に櫛や簪を投げつけた。

「お前が名君を地に落とし、故国をボロボロにした！何故だ！お前さえいなければこの国は更なる発展が望めた！」

聞いていて苦しかった。わかってた。でも理解しなくなかった。

口に出そうものなら、自分が崩れて消えてしまいそうだったのだ。

「お前はいてはならない」

「ワラワハイテハナラナイ」

「王、殺めてくださいまし、妾は王の手で、死にとうございますゆえ」

「千妃、お目のせいではない、朕がふがいなかったのだ」

「妾さえいなければ…このようなことにはなりませんでした。王は名君であり続けられた…そうでございましょう。妾を殺め首を曝してくださいまし。玉座にお戻りくださいまし」

「そなたさえいれば、朕は…朕は玉座などいらぬ」

「王、民草には貴方が必要なのです。王は天恵、神の子孫。軽々しくいらぬなど申すものではございません」

ぴしゃりと言い放つ小娘。王は二十も年下の千妃の言葉に吞まれた。

「朕は…朕は」

「弱気にならないで下さい」

千妃は懷から護身等を取りだす。千妃が妃になった際、彼女の父が贈った物だった。

「お願いします、妾はこれ以上、この世にいたくはございません。最後の願いです王の手にて」

「千妃…」

「王の手にて、極楽浄土へ…いえ、地獄に送ってくださいまし」

そうすれば、貴方の心にずっといれる。たとえ炎に焼かれようと、妾の心は、貴方の心と共にある。

ほら、寂しくない。

王は涙をこぼした。彼女がいて、知ることができた。ぬくもり、安らぎ、愛される喜び、愛する喜び。

「早く」

千妃も涙を落とす。

「故国が再び収まれば、また会うこともございましょう」

血の匂いが広がる。

「許されるなら」

貴女と共にいたかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1938d/>

王と妃 千妃

2010年10月9日04時48分発行